

## 第62期（2010年4月期）日本語研修コース

鹿 島 央

今年度4月期の大使館推薦の研究留学生は28名で、文系部局17名、理系部局11名であった。全員、名古屋大学へ進学する研究留学生であった。文系部局では、国際開発研究科が10名と昨年度4月期と同数であった。

### 1. 研修生

#### A. 大使館推薦（研究留学生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費研究留学生は、17ヶ国28名（インドネシア6名、カンボジア、フィリピン各3名、インド、ウズベキスタン各2名、アルゼンチン、アルメニア共和国、イラン、エジプト、ケニア、ニュージーランド、パラグアイ、ブラジル、ブルガリア、マラウイ、ミャンマー、ロシア各1名）であった。今回、28名のうち11名が全学向けの日本語講座を受講した。内訳は、IJ112（全学集中日本語初級後半）2名、IJ211（全学集中日本語中級前半）2名、IJ212（全学集中日本語中級後半）2名、SJ300、SJ301（全学日本語中上級、上級）3名であった。残りの2名については、1名は研究上の理由により、IJ111（医学研究科の研修生）を受講し、他の1名はレベルがかなり高かったため、ビジネス日本語を受講した。

以上のように、第62期は研究留学生28名のうち17名が日本語研修コース、残り11名は全学向け日本語講座を受講した。

### 2. クラス編成

授業は、昨年度と同じく2クラス編成とし、専任教員2名、非常勤講師9名の計11名が担当した。

### 3. 時間割と日程

授業はこれまでのように月曜日から金曜日まで、午前8時分45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ行った。

コースの日程は以下の通りである。

4月9日(金) 開講式、4月12日(月) 授業開始、夏季

休業7月22日～8月27日、7月30日～8月5日には、国際言語文化研究科の院生による夏期集中日本語実習を行った。8月30日(月) 授業再開、9月7日(火) 修了式。見学旅行は、予算の関係で実施できなかったため、名古屋市内を「めぐる」という市内観光バスで巡った。実施時期は、9月3日(金)で、当日予定されていた「専門発表」は、翌週の6日(月)に行った。

### 4. カリキュラム

カリキュラムは、(1)主教材 *A Course in Modern Japanese [Revised Edition], Vols. 1 & 2*（名古屋大学日本語教育研究グループ編）を中心とする授業、(2)その他の活動（テーマを決めて話す：楽しかったこと、趣味、国の観光地、国との違い）、ホームビジット、(3)専門について話す、の3つで構成した。以下に、概要について報告する。

#### (a) 教科書を中心とする授業（1～14週）

夏休み前に主教材である *A Course in Modern Japanese, Vols. 1 & 2* が終了するカリキュラムとし、最終テスト、話すテストを行い、夏休み明けに筆記テストのレビューを行った。以下は、授業内容である。

- ・ Drill
- ・ Dialogue
- ・ Discourse Practice & Activity  
会話の運用練習として各課の Discourse Practice にもとづくロールプレイなど口頭練習を行った。対面での許可をもらう練習、指導教員と会う約束を電話で行う練習、ホームビジットの家族との電話連絡などである。重要な活動であるとの評価を得ている。
- ・ Aural Comprehension
- ・ Reading Comprehension
- ・ WebCMJ（10課まで授業として）
- ・ 漢字および漢字セミナー  
300字の導入と練習、L15での電子黒板を用いた漢字練習。教え方は、教師により異なるが、17名のうち

14名は満足しているというアンケート結果である。

(b) その他の活動

・話す練習

これまでと同じテーマ（「楽しかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」）についてワープロで原稿を書き、話す活動として口頭発表を行った。日本人ゲスト（各回2名）にインタビューする活動も例年通り2度行った。

このコースでは、話すことに重点を置いているが全体的にみるとまだまだ少ない。

修了アンケートでも「より多くの話す時間を」というコメントをもらっているが、「Talking time」の導入もし、さらに時間的に増やしている。

・書く練習

ひらがな練習のための“Hiragana Textbook”の使用。ひらがなをいかに効率的に早く覚えるかが、このコースでは鍵をにぎるが、この教材は、そのための一助になっているようである。しかしながら、まとまりのある文章を書くところまでは時間的に余裕がない。したがって、話す練習での原稿作成をワープロを用いて行なうような、話す練習と連動させることで、書く練習を行っている程度である。

・Pronunciation Practice

コースの最初に発音システムを6回（45分 x6回）導入・練習を行った。

会話の時間に「Sound Practice」という発音練習用シートを使用し5分程度の発音練習を行った。主に、アクセントとリズムの知覚と生成である。ねらいは、特殊拍の長さの知覚とアクセントの下降の位置の知覚をできるようにすることである。

・ホームビジットプログラム

ホームビジットプログラムは、7月第2週目の土、日に実施した。

日本人の生活を実際に見てみることで、日本語での体験ができることが主な目的であるが、好評なプログラムである。特に大きな混乱もなく、無事に終了できた。

(c) 「専門について話す」(第15週)

このプログラムでは1名につき8時間の指導の後、各留学生それぞれが持ち時間8分(質疑応答も含む)で専門領域について発表した。発表は207講義室で行った。

ほとんどの学生がパワーポイントを使用した。

## 5. アンケート結果

### (1) コースの満足度

4段階で評価してもらった。「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」で、17名中14名が「3」、2名が「2」、1名が「1」の評価であった。

### (2) 自身の学習成果への満足度

4段階の評価で、「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」。17名中7名が「3」、8名が「2」、2名が「1」の評価であった。「1」の評価をした2名のうち、1名は、日本語が、コース開始時に期待していたよりできるようになったと回答し、他の1名は期待していたのと同じレベルであったと回答している。全体的には、期待していたほどできるようにはならなかったと回答した学生も3名いたが、成果には満足しているという結果であった。

## 6. まとめと問題点

今期はとてもまとまりのあるクラスであった。ただ、多少国で学習してくる学生については、逆に積極的に日本語を使おうとせず、英語に頼る傾向もみられた。前期には、9月の入学試験のために日本語学習に集中できず欠席する学生もいるが、今期はそのような目立った休み方をするものはいなかった。ゼミなどでの欠席もなかったが、そのための準備などで、かなりの負担があった学生もいた。研究のために農場にでかける必要のある学生もあった。1名については、持病のため体調がすぐれず後半で欠席が多少あったが、夏休み中に本国に戻り集中的な治療を行った。